

期日：令和6年12月19日（木）

15:00～17:00

場所：有田工業高校会議室

1 開会

2 学校長挨拶

第2回の中学生の進学希望調査の結果、定員が満たない状況であった。この結果を受けて、11月末に近隣の中学校、佐世保地区の中学校に配布したリーフレットについて紹介した。リーフレットには、各科の就職先を掲載し、本校のインスタグラム、本校のホームページの毎日更新、県教委HPで公開しているSAGA コラボレーション・スクール事業の活動実績のQRコードを掲載し、中学生向けの情報発信に努めたこと、12月14日（土）に有田町内で開催されている「朝飯会」に参加し、地域の方々への広報活動にも取り組んだことを紹介した。本日の報告事項、協議事項、意見交換において熟議をお願いし挨拶とした。

3 議事（進行は会長）

（1）説明・報告事項

①各科におけるSAGA コラボレーション・スクール事業の取組状況について

説明：（セラミック科長）

- ◇3年間のSAGA コラボレーション・スクール事業の振り返り
 - ・外部講師派遣授業として、伝統工芸士を招き、有田の窯業界の技術を学ぶ機会を提供。
 - ・セラミック科展を実施し、ろくろ体験や絵付け体験を中心に展示を行った。
 - ・地元小中学校との陶芸交流授業も実施し、高校生と小学生が交流する場を提供。
 - ・生徒の進路選択において、これらの経験が役立っているとフィードバックあり。
- ◇今年度の取組
 - ・今年度もセラミック科展を実施。特に夏季休業中のセラミック科展は大盛況。
 - ・博多阪急でのセラミック科展は過去最高の来場者数を記録。
 - ・地域みらい留学の広報活動も併せて行い、セラミック科の魅力を発信。

説明：（デザイン科長）

- ◇3年間のSAGA コラボレーション・スクール事業の振り返り
 - ・主に課題研究を中心に地域の課題に取り組む。
 - ・今年度は伊万里実業高校とのコラボレーションや県内専門高校同士での取組も実施。
 - ・地元役所や生産者と連携した活動を行い、地域貢献や連携の深さを重視。
 - ・地元に対する愛着を育む取組を継続。
- ◇今年度のSAGA コラボレーション・スクール事業の取組
 - ・佐賀新聞社との新聞広告企画を通じ、20年以上続く取組が成果を上げ、今年は4つのうち3つの受賞を果たした。
 - ・企業との連携を通じてデザイン科の強みを発信。

説明：（電気科長）

- ◇3年間のSAGA コラボレーション・スクール事業の取組
 - ・地域連携や地域貢献に焦点を当てた取組を実施。
 - ・令和4年度には中学校で電子オルゴールづくり体験教室を実施。
 - ・令和5年度にはJAXAGAと共同で人工衛星のミッションボードを制作し、令和6年度は、打ち上げ後にデータ集計を行った。
 - ・有田駅と連携してプロジェクションマッピングを実施し、生徒自らが構想・交渉・計画を進めた。
- ◇今年度の取組
 - ・今年度は工場見学や出前授業を実施し、地域とのつながりをさらに強化した。細かな取組を通じて、地域貢献や生徒の成長を促進することができた。

説明：（機械科長）

- ◇3年間のSAGA コラボレーション・スクール事業の取組
 - ・地域連携を重視し、地域イベントへの参加や什器提供を行った。
 - ・溶接技能の講習を行い、生徒らは進路選択において新たな視点を獲得することができた。
 - ・機械科の魅力を広く伝えるために、地域との連携を深めていくことが課題である。
- ◇今年度の取組
 - ・今年度も地域連携を強化し、町内との連携を進めた。
 - ・予算や人員の課題はあるが、可能な範囲で地域との体験活動を継続していきたい。
 - ・自動車メーカーのホンダが開催するエコマイレージ・チャレンジなど、広くPRできる活動にも取り組む予定である。

説明：（事務局）

- ・定時制セラミック科については、伊万里実業高校との共同研究が行われている。

- ・本校からは、多肉植物の寄せ植えが提供されており、この活動を通じて伊万里実業高校と連携事業が進行している。
- ・定時制のデザイン科は、全日制デザイン科と連携して事業が進められている。

意見：(委員 A)

- ・コラボレーション・スクールが今年で2年目か3年目かについて確認。
- ・コラボレーション・スクール開始前から、独自に実施されていたプログラムがコラボレーション形式に進化した経緯について。
- ・コラボレーション・スクールの実施にあたって、新たに企画された取組と、従来行われていたプログラムとの違いについて確認。
- ・新規の取組と既存の取組の違いを改めて説明してほしい。

回答：(セラミック科長)

- ・特に新しい取組はなく、既存の活動を十分対応できると判断し、継続している。

回答：(デザイン科長)

- ・新規事業の立ち上げはないが、毎年27の新規事業を進行しており、課題研究を中心に取り組んでいる。

回答：(電気科長)

- ・地域とのつながりを重視した取組を進めており、具体的には中学校での電子オルゴールづくりなどが例として挙げられる。

回答：(機械科長)

- ・新しい事業を立ち上げることはないが、学科の再編に伴い、地域との連携を強化する方向にスタンスを変更している。
- ・これらの内容から、各学科が既存の活動を見直しつつ、地域とのつながりを深める方向で取り組んでいると理解してもらいたい。

(2) 協議事項 SAGA コラボレーション・スクール成果報告会の発表資料について

説明：(事務局)

- ・SAGA コラボレーション・スクール重点校として令和4年度から3ケ年の取組成果について、資料をもとに説明を行った。
- ・説明内容は、以下のとおり。
 - ①テーマ「地域を愛し 地域に愛される学校づくり」と全国募集の推進
 - ②スクール・ミッション及び学校教育目標
 - ③グランドデザイン
 - ④コミュニティ・スクールの魅力
 - ⑤コミュニティ・スクールと地域学校教育活動の一体的推進のポイント
 - ⑥本校の地域・企業・大学等と協働した実践的教育（魅力ある教育プログラム）
 - ⑦学校魅力化評価システムアンケートからの考察
 - ⑧地域みらい留学における取組

質問：(委員 C)

- ・学校魅力化評価システムアンケートからの考察①の「自主的に調べ物や取材を行う」は、今年度61%と昨年度より10%ほど上がっているが、全国平均との比較では10%ほど低く差がある。その理由はどのようなことが考えられるのか。現1年生が3年生になると、全国平均に近くなるのではないかと思う。学年を経るごとに増えてきているのはいいことだと思う。

回答：(事務局)

- ・生徒は3年で卒業していくので、調査対象の生徒が変わる点も影響していると思われる。
- ・3年生は課題研究や卒業制作展などを実施する上で、1・2年生よりもかなり多くの調べ物をするという点から3年生で大きく伸びていると考える。1・2年生がもう少ししっかり取り組めば全国平均に近くなると考える。

意見：(委員 A)

- ・学校魅力化評価システムアンケートからの考察③「58. 将来自分の住んでいる地域のために役に立ちたい」という結果が低い状況ではないかと思う。これは、もしかして、子どもたちに関わっている大人が変えられるものではないか。また、自己肯定感に働きかけることで社会を変えられるということを伝えていくことが大切であると思う。

意見：(委員 D)

- ・これについては、アンケートに答えている生徒に具体的に話を聞いてみたり、そういう流れの中で少し改善したりとかできるのかもしれない。
- ・この質問の解釈が難しく、単純に低いから良くないと決めつけられないものではないかと思う。
- ・この回答については、「自分の住んでいる地域が違うために役立ちたい」という気持ちが少ないといくことが本当に良くないのかと疑問に思う。
- ・いろんな生徒がいて、「地域のために」と考えている生徒よりも「グローバルな視点で」と考えているのもあるのではないか。

意見：(委員 A)

- ・学校魅力化評価システムアンケートの「58. 将来自分の住んでいる地域のために役に立ちたい」という結果について、意見があるが、この課題では、生徒、教職員、保護者、地域住民それぞれにとって、この取組がどのように魅力的であるかを再確認することが求められる。また、地元との連携を深める方法についても考えていく必要がある。
- ・まず、教職員にとってコラボレーション・スクールの意義や魅力を十分に理解してもらうことが重要である。それにより、地元とのつながりを意識した指導が可能となり、結果として生徒にも良い影響を与えられられる。
- ・卒業後に地元で就職することを促進するためには、地元で働くことの魅力を感じられるような取組が必要である。例えば、地元企業や地域の魅力を生徒が直接体感できる機会を設けることで、生徒が「地元で役に立ちたい」と感じられる環境を作ることが大切である。
- ・一方で、現在行われている活動についても、単なる発表会形式にとどまらず、地域と連携した新しい形の活動を模索する必要がある。教職員が地域の魅力を感じ、それを生徒と共に探求することで、より実りある学びが提供できると期待される。
- ・しかし、課題もいくつかあり、例えば、現状の取組を見直し、どの部分が地域にとって有益なのかを明確にする必要がある。また、新しい活動をどんどん増やすのではなく、既存の取組を効率化し、質を高める方向で進めるべきである。教職員の負担を軽減しながら、効果的に取り組む方法を模索することが重要である。
- ・さらに、生徒の主体性を育むために、課題研究を通じて地域の魅力を発見し、それを生かした活動を行えるような仕組みづくりが求められる。地域や企業との連携を深めることで、生徒が自ら考え行動する場を提供することが大切である。
- ・具体的には、中学生への教育活動や地域企業との連携をさらに進めることが提案されている。例えば、企業が協力して技術や材料を提供し、生徒たちの活動を支援するような仕組みを作ることが考えられる。
- ・議論の結果として、既存の取組をブラッシュアップし、・地元企業とのさらなる連携を模索し、生徒に「地域で働くこと」の現実や魅力を伝える。
- ・地域企業が協力しやすい枠組みを作り、この取組が、生徒、教職員、地域住民にとって魅力的なものとなるよう、次回の会議でより具体的な方策を話し合っていきたい。

進行：(会長)

- ・委員 A さんの意見に対して、各科からコラボレーション・スクール事業において、いろいろとコラボレーション作りに対して、どのような新たな取組を今後やっていきたいのか、1 つずつ意見を言っていたきたい。

回答：(デザイン科長)

- ・新しい取組もこれから考えていかないといけないと思っている。そのためには、ビルドばかりではなく、スクラップしていかないと考えている。

回答：(セラミック科長)

- ・できる仕事の選別ができてなく、いろいろ抱えているものがあまりにも多すぎて、新しいことに取り組む状況ではないのが現状である。
- ・私たちの言葉不足かもしれないが、私達もセラミック科の代表として、他のセラミック科職員も、課題研究や伝統工芸社の派遣事業など多くの業務を抱えながら取り組んでいるという現状である。
- ・そういった中で、有田の魅力を生徒には十分伝えて言っているつもりである。伝え方がうまくいっていないのかもしれない。いろんな取組を新しく考えていく中で、スクラップするものを精選して、取り組む内容を磨き上げてやっていかないといけないと思っている。

回答：(デザイン科長)

- ・地域みらい留学と一緒にこのコラボレーション事業が、ほぼ同時に立ち上がったわけだが、当時、私も担当者として、各主任に説明をした中で、1 つよく覚えているのは、佐賀県が SAGA コラボレーション・スクールって取り組み始めた時点で、逆に本校はもうモデル校のように、地域とのコラボレーションを常にやってきた学校なので、新たに何かしないといけないというようなプレッシャーは感じないでほしいということを使った。
- ・セラミック科は、地域との交流の塊のような授業のカリキュラム組んでいる。
- ・我々がしっかり取り組んでいる授業に関して今やっていることが、どの項目でどういう効果があってどういう目的で取り組んでいるかということは、言うなれば今まであまりそういう指標をもっていなかったわけではないのだが、改めてこういうスケールを出してもらったおかげで、この時期に今やっていることはこれにあてはまるということを再認識・再整理できるような機会にもなったのではないかとと思っている。
- ・スクラップ&ビルドにより、これまで取り組んできた事業がより洗練された、より有田という財産をうまくいかせるブラッシュアップをやっていけるようなきっかけになったのがこの事業ではないのかと思っている。
- ・私たちデザイン科としての考え方としては、課題研究で取り組む時は、先輩がやったことをなぞるのではなく、有田なり自分の地元に対してどれだけ魅力を自分の目で見つけることができるかというような視点を持つように指導している。

- ・毎回新しい技術や知らなかったことが飛び込んできたりするたびに、我々も学びを得ているようなところがある。
- ・有工はすでにそのスケールで授業をやっていたことに対して、県教育委員会からコラボレーション・スクール事業の指定をいただいたようなもので、指標と予算がつけられ、仕事と予算をいただいたようなところがある。それを我々の自己評価とするし、生徒が伸びるための評価の指標にもしたい。

回答：（電気科長）

- ・指導のあり方に関しては、やはり「ものづくり」というそちらの方に重点がいつてしまうというところがある。
- ・地域と関わった活動は、課題研究を中心に組み込んでおり、数年前よりは確実に増えている。数年前であれば確実に「ものづくり」をして発表して展示をして、終わっていたというところがあった。
- ・卒業制作展でも来訪者に楽しんでもらえるものを作り実際に触れてもらっている。
- ・それが3年間のうちで3年生の授業である課題研究で発揮できたらいいのではないかと考えている。さらに、こちらが枠にはめるではなく、生徒自身で考えながら協力しながら活動し、その中で地域と関わったということができればと思う。
- ・課題として感じているのは、中学生に対して体験教室を行うことを考えているが、電子オルゴール作りをするにしてもコストがかかってしまうので、そのコストをどこから持ってくるのか、中学生全員分を準備するとコストがかさむ等を考えて悩んでいるところである。
- ・コラボレーション・スクール事業に向けてというイメージではなく、地域とのつながりを重視した取組という観点で進めている。

意見：（委員 A）

- ・企業の方にこういうことやりたいから協力してくれと依頼してほしい。オルゴールに限らず、そういう企業は、積極的な働きかけをして、企業 PR や地元の子供達に PR できるという宣伝効果までも含めていろいろと探せば見つかると思う。

回答：（機械科長）

- ・コラボレーション・スクール事業に限らず、これまでと大きく違う点というと、やはり学科の再編で職員の定数が大きく減少したというところからスタートしているところである。
- ・もともと地域連携は、社会性を育む、社会と繋がるような授業のフォーマットを持っていない中でのスタートであったので、少ない職員の中で検討しながら、授業に取り組んできたところである。
- ・機械科の独自性を活かすのであれば、金属加工や溶接技術を生かした作品の制作になってくる。今はイベントベースで、またはスポット的に取り組んでいる。イベントへの参加も多くなり、今後については今まで寄贈したものを、よりよい形でブラッシュアップして、寄贈するなどの取組につなげていきたい。
- ・機械科の方でも課題研究ではここ数年は、「地域」とか「貢献」といったテーマの班を設けている。多くの授業がある中で、一度に手がけられるわけではないが、生徒が取り組み可能なものの中で、少しずつ地域に還元できるような取組を行っている。
- ・今ある小さな事業をしっかりと継続して、学科や地域の企業との連携につなげたい。
- ・機械科に限らず、本校は広域で生徒が入学し、地域の定義というののもかなり広い。その中でそれぞれの学科の特徴を活かしたような企業の取組について知る機会を、有田町だけではなく近隣の市町にも広げ、広域的な視点で捉えた地域での取組としたい。
- ・現在の人員で新たに大きな事業を始めることは正直難しい。できるだけ多くの方々からご要望をいただいき、その中で少しずつでも取り組めるようなものを創出していきたい。今後はそういったものについてもご意見をたくさん機械科に向けて発信していただきたい。

（3）研修 有田工業高校における SCS 事業の状況～高校魅力化ルーブリックの活用～

進行：（CN）

それではここからは学校魅力化コーディネーターがファシリテーターを務めます。それでは、（3）の研修に移ります。

説明：（事務局）

- ・「有田工業高校における SCS 事業の状況～高校魅力化評価ルーブリックの活用」について、SAGA コラボレーション・スクール事業の伴走支援者である学校魅力化アドバイザーが作成された資料をもとに説明を行った。
- ・説明内容は、以下のとおり。
 - ①研修資料の目的
 - ②SAGA 唯一無二の学校魅力化事業について
 - ③唯一無二の誇り高き学校づくりの基本的な考え方
 - ④PDCA サイクルの構築と取組状況についての評価手法
 - ⑤「高校魅力化ルーブリック」を使ってセルフチェック
 - ⑥学校魅力化アドバイザーによる9月時点での評価ルーブリックにおける評価（4段階）
 - ・地域と協働した学校運営：評価「3」
 - ・地域・企業・大学等と協働した実践的教育：評価「4」
 - ・グランドデザインの確立：評価「2」

- ・地域協働に関する行内体制の整備：評価「3」
- ・生徒募集：評価「3」

⑦「高校魅力化ルーブリック」のセルフチェックをもとにした改善ポイント

- ・資料 13 ページで、PDCA サイクルの「A：アクション」の部分で、委員のみなさまと「高校魅力化ルーブリック」の結果を元に、それぞれの項目ごとに、このあと、意見交換をしながら考えていきたいというシナリオです。
- ・資料の 15 ページから 19 ページは、他校の取組の事例です。
- ・資料 20 ページ「委員の皆さんの議論の目線を揃えるために、改善ポイントを準備しています。
- ・5 つの項目全てに対して改善案を考えるのは大変なので、今回はご自身が気になる項目を 1 つ選んで、その項目に対する改善案を考えていただければと思います。

意見交換では、3 つの項目を取り上げたいと考えています。

とくに、③グランドデザインの確立は、9 月段階の評価は「2」でしたので、最初に 10 分程度。そして 2 番目に、④地域協働に関する校内体制の整備について、次に、⑤生徒募集について、意見交換をできればと考えています。資料の 21～25 ページは、その改善ポイントをまとめた資料となっているので、参考にされながら、しばらく考える時間を設けたいと思います。

4 意見交換 「有田工業高校における SCS 事業の状況」

進行：（事務局）

- ・資料 12 ページの評価ルーブリックの表を別添で配付しているので、委員の皆さまには「改善に向けた取組の提案」についてご意見をいただければと思っております。まずは 10 分ほど、資料をもう一度見ていただき、③グランドデザインの確立と④地域協議に関する校内体制の整備についてご意見をください。

意見：（委員 B）

- ・グランドデザインについては抽象的で分かりづらい部分がある。
- ・これまで築いてきた学校の特性や魅力や「スクラップできないもの」を再評価し、それを柱として立て直すことが重要である。

意見：（委員 C）

- ・評価ルーブリックによる評価は、どのような基準で判断されているのか、またこれらの課題に関して、こういった材料をもとに判断されたのか説明してほしい。
- ・これらが相対的な基準によるものか、例えば他校ができていることを基準にしているのか、そういった分かりやすい基準で評価されているのか、それとも絶対的な基準があるのか知りたい。

回答：（事務局）

- ・学校魅力化アドバイザーにより、関係職員へのインタビューをもとに、できていることやできていないことを確認しながら、評価ルーブリックをもとに評価が行われている。
- ・グランドデザインが生徒に浸透していないという点が大きな課題として挙げられている。
- ・現在はその反省をもとに、昨年度末に県教育委員会に提出したグランドデザインに、学校運営協議会の意見交換でのご意見を反映させ、文言の表現などの修正を加えた。
- ・教室に掲示し、生徒にも分かりやすく伝える取組を行っている。
- ・保護者への伝達方法についても改善を進めていく予定である。

意見：（委員 E）

- ・PTA の会議でも、グランドデザインについて保護者への周知をどうしたらよいのかについて話が合った。
- ・グランドデザインについては、今の子どもたちは TikTok や Instagram をよく見ており、情報を瞬時に判断する傾向があるため、伝える言葉や方法に工夫が必要ではないか。
- ・興味を引く言葉や視覚的なインパクトを重視するべき。

意見：（委員 D）

- ・資料にグランドデザインの確認についての改善ポイントが書かれているが、その中で「生徒の視点でこの学校で何をどのように学び、何ができるようになるかが重要」と記載されている。
- ・私たちがグランドデザインを作成する際にも、やはり生徒に理解されないという意味がないということを強調した。生徒目線で作らないと浸透しにくいと感じており、修正が可能であれば、もっと生徒目線で作ることが重要である。

意見：（委員 C）

- ・グランドデザインの浸透には、保護者会や授業参観の場で説明を行うことが有効であると思う。
- ・学校ホームページで、クリックしたら一目で見られるようにできるといいのではないか。
- ・ビジュアルで分かりやすく載せる方法が効果的であると思う。

意見：（委員 F）

- ・グランドデザインの評価項目については、この基準に基づいて評価するのであれば、評価「3」または「4」でいいのではないか。
- ・日常的に参照し活用されるためには、TikTok などを活用するなどの工夫が必要である。

- ・授業を使って、グランドデザインをしっかりと読み込む時間を設ける必要がある。高校生として読みとく力をつけるためにも役立つと思う。

意見：(委員 C)

- ・グランドデザインの生徒への浸透のためには、分かりやすい言葉で作ったものをもとに説明する時間を設ける。
- ・企業でも取り組んでいるが、グランドデザインに関しては、なぜこのようなことに取り組むのか、どのような意味があるのかについて、ことあるごとに説明していくことで、生徒自身も語れるようになるように取り組んでいく必要がある。

意見：(委員 A)

- ・グランドデザインで、有田工業高校の目指すところや、こんな目標を叶えることができますという唯一無二の誇り高き高校ということについて、簡潔に見せられるようにする必要がある。
- ・ブラッシュアップした有工らしいものをいくつか入れていけば、もっと伝わるものになると思う。

意見：(委員 G)

- ・コミュニティ・スクールに取り組んでいるという横断幕の掲示を、国道沿いのフェンスに掲示するなど効果的に行うことで、在校生徒や保護者、地域の方への浸透につながるのではないかと。

意見：(委員 H)

- ・校内体制の課題とその評価の理由について説明してもらいたい。

回答：(事務局)

- ・学校魅力化アドバイザーの資料では、5観点で評価をされている。この「校内体制」については、
①校内体制の見直し：「○」
②ワーキンググループ・校務分掌を含む目標設定：「○」
③ワーキンググループ・校務分掌での役割分担：「△」
④定例会議・ワーキンググループとしての活動についての議論や企画、実践：「○」
という評価である。役割分担では「△」ということで、評価「4」ではなく評価「3」という評価になっている。

意見：(委員 E)

- ・もっと PTA としても関わっていききたい。役割分担の中に、PTA も入って協力していききたいと思っている。
- ・学校として取り組みたいことがあっても、人員不足や人材の確保、予算の問題でできないこともあると思うが、先日は全校マラソン大会では協力できたが、もっと協力していききたい。
- ・PTA と先生方や地域と協力して、生徒たちの活動の充実につなげていききたいと思っている。
- ・PTA の保護者の中にも、卒業生や地元企業の方もたくさんいるので、地元企業と関わりたいとか、手伝えることがあったら協力したい方は、たくさんいると思う。特に卒業生の方々は、有工に対する愛とか熱がすごくある方がいると思うので、PTA で役割分担としてご協力できることがあれば、声をかけていただいたら、できる体制を整えたい。

意見：(委員 A)

- ・外部のいろいろな企業と協同をしたいならば、どなたが各科の窓口になるのか、今の科長さん達がするのかというのを今一度しっかりと明確にしてもらえれば、そこに向けて PTA や企業などと話し合えるのではないかと。

進行：(事務局)

今日の意見交換は参考に議事録をまとめ、1 月に実施予定の学校魅力化アドバイザー訪問による伴奏支援の資料とさせていただきます。

意見：(委員 A)

- ・この運営協議会の委員の方には、何年かは残ってほしい。例えば、高校も 3 年間が一区切りなので、その経過を把握できるように、この年度に加えて運営協議会のメンバーも参加できるような形で検討してもらいたい。
- ・学校運営協議会の規約に、自分たちの意思を持って続けるということに際して、文言等々がなかったので、もう一度詳しく確認したい。先生達が変わったら、学校運営協議会の委員も刷新するところ、学校の常というふうには感じているが、やはり、学校運営協議会の方達は、この地域に残ってずっと長年やっていくというところがあるならば、そういう継続性もちゃんと担保に入れた形での学校運営協議会の継続、そういうメンバーの方々の長い繋がりというのも大切にいただければと思う。ぜひ次回、その案件も 1 項目入れていただければと思う。

5 諸連絡

○第 6 回学校運営協議会について

6 閉 会

校長より、議論の中で挙げたスクール・ミッション及びスクール・ポリシーの生徒への浸透について今後取り組むとともに、各委員からの意見について謝辞を述べ、閉会の挨拶とした。